

第12号では韓国から届いた貴重な原稿を多数掲載できた。李宇衍氏からは、韓国で今年3月から使われている小学校の社会科教科書の土地調査事業と慰安婦・戦時労働に関する記述が、すさまじく偏向していることを指摘する報告と、朴裕河教授の最新刊『歴史と向き合う 日韓問題—対立から対話へ』に対する鋭い批判を中心とした書評をいただいた。

韓国で子育てをした日本人の母親からは、韓国でなされている反日教育のひどさを告発する体験談をいただいた。李宇衍報告と併せ読むと、韓国の反日教育の実態がよく分かる。日本統治時代を経験された韓国人から私（西岡）宛てに届いた、長文の手紙も掲載した。元慰安婦の女性が実際に韓国でどのように暮らしていたのか、韓国で慰安婦問題がどのように始まったのかなどについて教えていただいた。韓国で研究活動をしている朴裕河教授には、このような年長者の声は届いていないのだろうかと考えつつ、李宇衍氏の書評を読んだ。

3月1日、ベストセラー『反日種族主義』の編著者である李栄薫氏が有力紙朝鮮日報に、「謝罪を物乞いする卑屈な外交を中断せよ!」と題する意見広告を出した。その中で李氏は、「戦争期に大量の韓国人が日本に強制的に連れて行かれ、無（低）賃金の奴隷として酷使されたという主張は、韓国人の集団情緒、反日種族主義が作り出した虚偽の記憶だ」と断定した。

その立場から李氏は、日本企業に慰謝料支払いを命じた韓国最高裁判決を「韓国司法部の歴史上消すことが出来ない一大汚点だった」と批判し、尹政権が支払いを肩代わりする代わりに日本政府と企業に謝罪と基金への出資を求めていることを、歴史的事実と反し国際法的根拠がない「先進文明国家としてはけっして行ってはならない卑屈な外交」だ、と断じた。

その上で、韓国政府がこの問題の解決策を議論する場から、李氏ら「歴史的事実と国際法に立脚したまっとうな意見を提示してきた専門家を完全に排除した」と批判し、結論として「真実が存在しない外交は一つの国を破滅に導く。尹錫悦政権はまやかして卑屈な対日外交をすぐに中断し、日本との歴史問題はもはや存在しないことを宣言せよ」と主張した。

同じ日に李栄薫氏、李宇衍氏、本号書評で取り上げた『赤い水曜日』著者の金柄憲氏、韓国経済新聞元主筆の鄭奎載氏をはじめとする46人の知識人が、「尹錫悦政権は日本との歴史紛争の中断を宣言せよ」という声明を発表した。これら知識人は「真実中心の韓日友好派」を自称し、李氏の意見広告の趣旨について、より深く論じている。歴認研は3月15日から訪韓し、彼らと懇談会を持つ。まだ、少数派ではあるが、真の友好は真実の上にはしかないという共通理解が、日韓の間で出来つつあることを嬉しく思っている。（西岡）

今号は特集1として、昨年暮に開催した特別集会「安倍晋三元首相と歴史認識問題」の様をお伝えしました。安倍元首相の歴史認識の戦いの軌跡を再認識した次第です。基調講演をいただいた衛藤晟一元総理補佐官には、心より御礼申し上げます。

（勝岡）

歴史認識問題研究

（年2回発行）

第12号（令和5年春夏号）

発行日：2023年3月22日

発行人：西岡 力

編集人：勝岡 寛次

編集部：歴史認識問題研究会

頒 価：1,000円

発行所：〒277-0065 柏市光ヶ丘2丁目1番1号

公益財団法人モラロジー道德教育財団

西岡 力 研究室

Tel：04-7173-3197 Fax：04-7173-3199

印刷所：株式会社 長正社